永嶋福太郎編輯
鹿兒島戰爭日記
後編
四号
辻文板

備の八代口の官軍へ進路を三方に分ち
別働隊第三旅團陸軍少將兼大警視
川路利良君の一手へ肥後の水俣に本營を
置かれ薩路に出水へ向ひて
進ずるを陸軍少將兼司法
卿の大浦山田顕義君の別働隊へ第二の旅團へ入吉
をうちを攻撃して日向路へ進ん
まさ陸軍第三旅團陸軍
少將三浦梧樓君
の手へ大河内より
薩隅日向
せうまる

山田顕義

大口へ
進ずる
第二旅團
三より少將重
豆君の一隊へ
兵と水俣の
近傍に
止まる
何
方の
方面あり
も難戦の
遠ふの処

A429
14
010190510218
48-7890

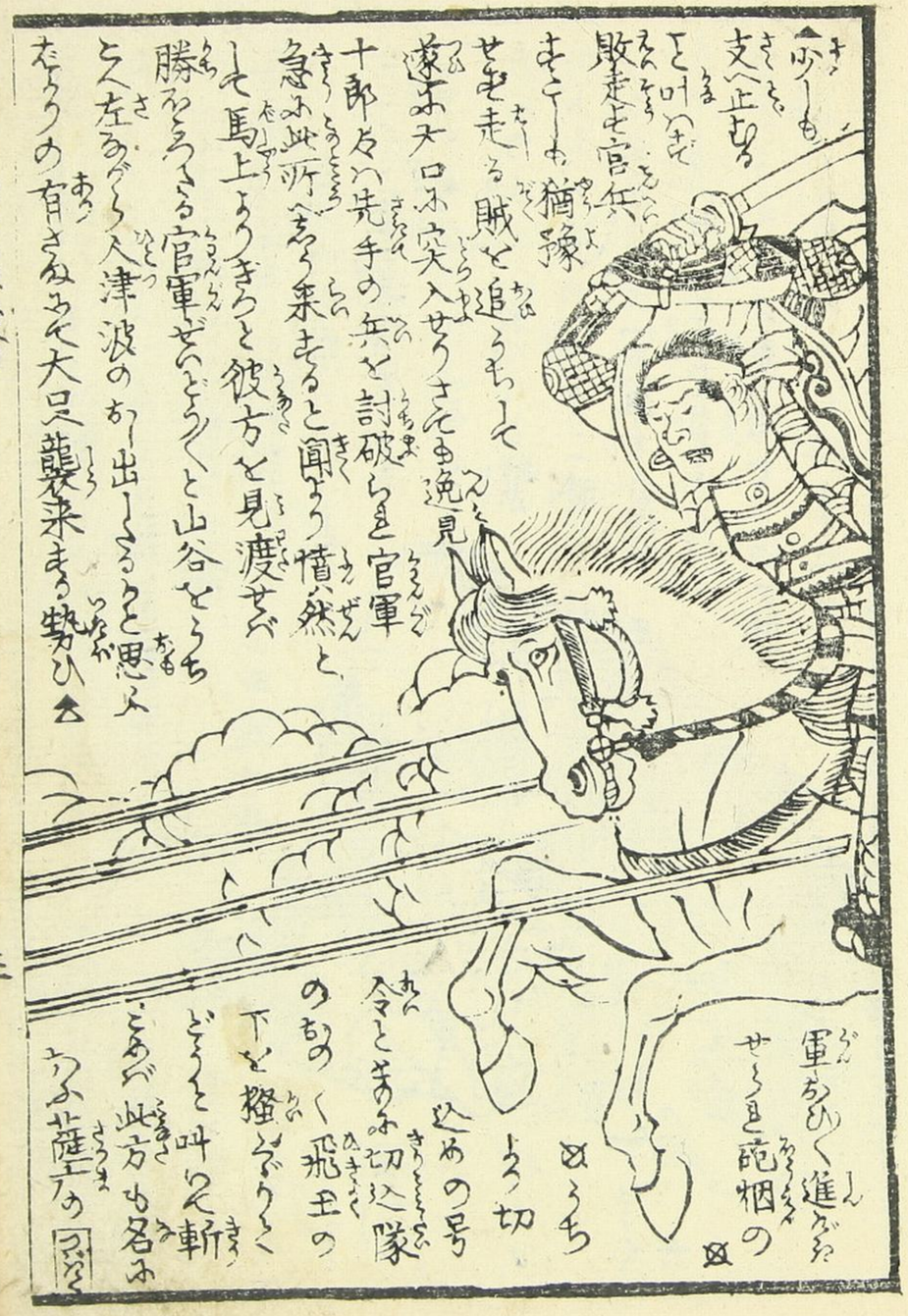
つぎ 兵を発して是を
救ふべきの手法をあ
なり然るに第三旅団の
兵い大口へ進撃せ
その一所い三ケ国に達し山
岳四方につらなり諸方へ
通ずる道あわく要害無
双の地にして背
九州に勇名をとど
ろかせし鬼と称せ
られし新納忠
の守一氏が領
せし地なりと

△たゞちに誘導さるゝ田中藤之進 ☒土墨と
鈴木弥介とふたつの先鋒と
なり大口街道に
三百余人を
率ひて此処
を守りし官兵勇進
して攻よせ
て一挙に
破らんと山の
麓に押よせ
たる賊兵これと

しかるに官軍
ぜいい
山ぐく
嶮谷を
ちくちと
り此大
口に集
まる賊軍凡
そ八百有余人
にして惣大将い
うとしてせいのうち
あく無敵の強将
△ちなみに
小銃のつ
先きをく打
下ル官軍
×
×巻砲
しざんしのいなづの
砲戦中双軍の勝
敗ものこゝろ
官軍いよ〳〵益〳〵
△ちなみに
攻登り
先おくれ
隊

賊墨ゐちうる
きゝゐ強刀を
ぬきはらひて切て
入れば流石ゐ猛
き強兵も抜刀
ゐ奮勇のきゝ
ゐ突出たるとく
もゐ二の砲墨ゐうげ
い兵ゐ抜刀隊へ
きゝうさまゐうと
急ゐせまりてきり
入れゐ賊兵

逸見十郎太
ゐ逸見
まちさくとゐぐ
左右の山ゐ
ふせめた官軍ゐ
きゝらゐ
と待ちうゐ官兵
の大軍らゐを
らゐく絡とて押来り
ちうこゐ
めりげてゐ銃
しく打ちたり
両軍なびゐ砲
ちんゐ官



少しも
支へ止る
と叫ゐ
敗走せる官兵
ちうゐ猶豫
せも走る賊を追うもって
遂ゐ大口ゐ突入せうさせも逸見
十郎太ゐ先手の兵を討破らを官軍
急ゐ此所へ来ると聞よう憤然と
して馬上ようきうと彼方を見渡せば
勝ゐうさる官軍ゐどうくと山谷をうち
と左ゐぐゝ入津波のゐ出ゐると思ゐ
だうゐめ有さゐゐ大只襲来まる勢ひ

軍ちゐく進ぐゐ
せゝを砲烟の

ゐうち
ゐう切
込めの号
令とまゐ切込隊
のものゐ飛丑の
下を掻ぐうく
どうと叫ゐ斬
こゐば此方も名ゐ
ゐ薩方の

つゞき

強おもう武者撃けんい好むところと
数十名の賊兵手めくみ得めとうちふり
現へ出て双方入りちがひて奮
激突せん官軍い抜刀隊み
ちゝを合せて突ゝたるみさん
と二三丁ゐど進むをうゝう
一斉の号砲山谷みゐゞた
左右の山間みゐゝと繁
茂りたる樹の間より一時み
うち出す砲玉官軍不意み
左右より打ち立を賀みめの
少ゐゝを前み奮激せし抜刀隊
も是がゐみ英気を粹ゐ賊兵の

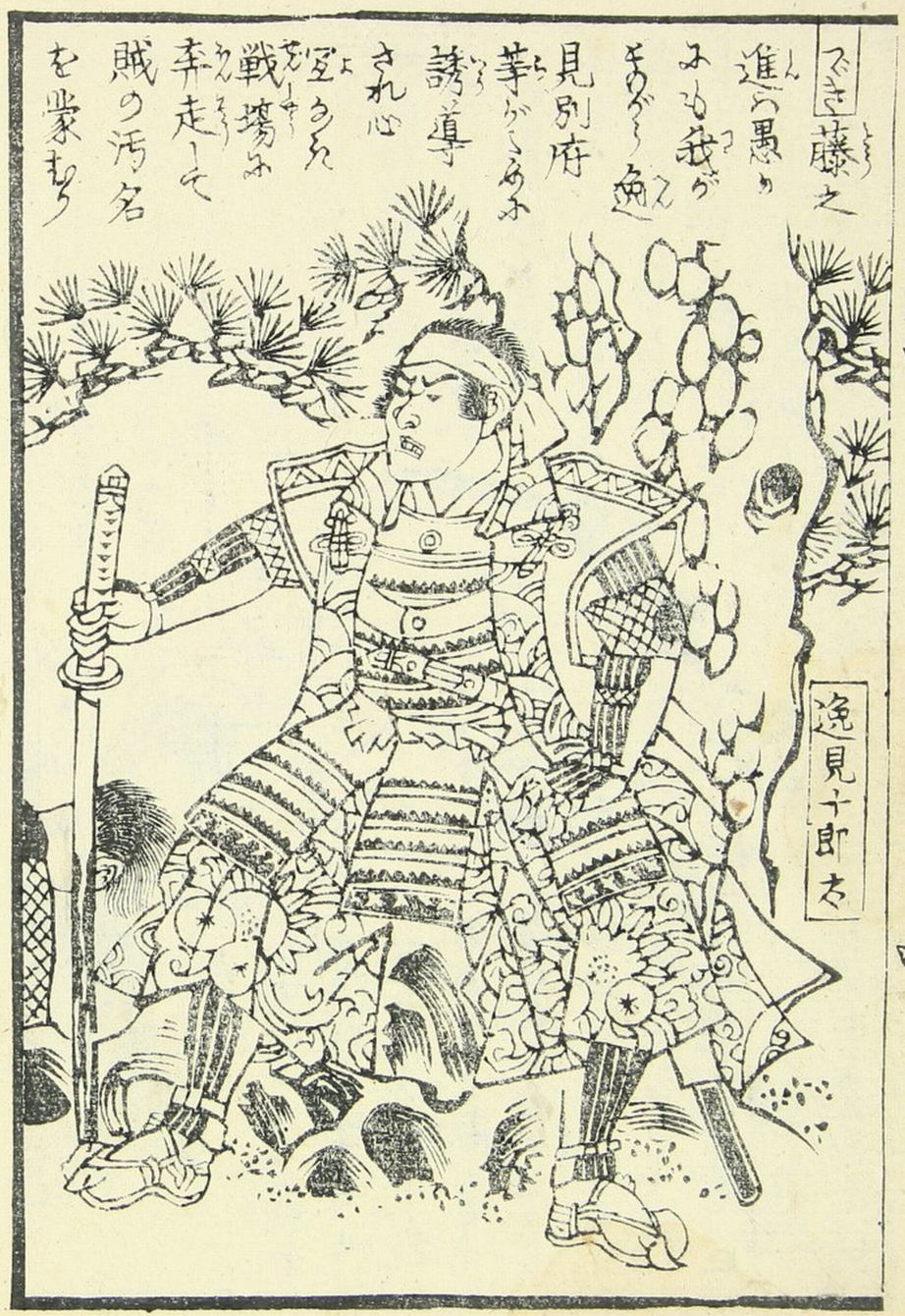
田中藤之進

▲逃さゝのい誰を
の用捨ゐく斬
捨つべし
進めやく
と自ら
強刀を
打ち
揮りて
きびし
く

烈しゝ太刀風ふきう立ら是物
軍四五丁だりゝ追立ら是大苦
せんみ及ぶ一ゞ官兵漸次み
勢兵くゝゝて再い勇を
ふるゝく攻討ちけるべ
賊兵たちもち敗を
ぶりとたゝゝ崩れ渡れ
び逸見十郎ちとの
体を見ゝく言甲斐ゐた
各ゞゞ有さゐゝるみの
ゝゝゝを敵み敗ら是何め
ゝくあゝく諸軍み面をゆんさる
べきかゐゝゝ一歩も退くゐゝれ▲

鈴木弥助

▲下知
み怒ゆれゞ崩れ
立ちたる兵士等も
退どゝく斬り殺
されゞゝ敵とさ
ちがひ死ゐんみ成と
必死の勇を現へ
攻め戦ゐひしゝ
双方死傷数しれ
おかる烈しゝ戦
ゐひの中みも田中



てき藤之進ら愚かみも我がものゝ逸見十郎太見別府等がゝあふ誘導されし心至るべき戦場ふ幸走して賊の汚名を蒙むり

空ゝく命を失いんよう官軍の軍門ふくだり身を全うふまるこそ上策あゝめと断然と心ごとり直ゝ遂ふ自害せんあ且ふ従ゞあ数百名たちまち此所み降伏せゝ如何ふ逸見ゞ勇猛なりとも兵士ゝくと戦うひ防ぐゝと能はず歯ぎしりゝて奮怒の思ひとあるそとも共ゝ詮術もなりされば残兵ゝゝふ百騎ふ足らぬ従兵を引たの左手ふつゝある山面へ進まりゝゝ官軍の勢ひ破竹のごとく大口とゝゝ追撃ヤゝゝ稍日暮ふ及び

ぎ〻進撃を止め守線をとりなり逸見
い討らもも従兵多く討死ー田中らゝ降
伏ろ味方愈敗軍とゆゝーとを遺
憾みなめくどうち残されー兵士ゝみ多少の
疵をうけて身体壮健なるいまゝなく
已も甚ざ労ーゝ心ゝも無念を
らゝく辛くも山間ふのゝーゝ此ところふ
新納一氏ゝ愛せゝーー一株の古松ゝり
今ゝ枝葉四方ゝ繁茂昼も小暗き程ゝあ
炎暑とさゝるゝい屈竟の岡ゝ逸見十郎太いゝの
処ふ足と止め後ゝの方をゝ久ゝいゝ官軍のゝひ来る
へき様子ゝけゝば彼松の根ふ腰ゝちゝゝ手負の兵士
を介抱ー志ゝ労ーゝを休めゝーゝ山間樹枝とつゝ

冷風肌と通ー終日然ゝゝとゝゝ天ゝ玉ゝゝ汗を
薩ゝゝゝゝの筒袖ゝゝゝ間ゝゝゝ激戦ゝ凄ぎ
ゝゝ炎暑とゝゝれゝ心地
自づと安ゝを
覚へー兵ゝら
木の根を
枕ふゝゝと
ゝゝゝと睡眠ゝゝ逸見い
四方を打ゝゝゝ秋告ゝ蝉の
声籟音ゝゝとーゝゝ
涼ーゝふ仰向きゝれい
月光枝葉
とゝゝ松葉ゝゝとゝ色と

ゝゝわゝど味方のいゝ
ゝゝ漸次ゝゝゝゝ
賴ゝゝゝゝ

枝の月光

つぎ 生徒い田原坂の一戦
ゆ多く討死して今へ諸
々より集募ありて
士卒の輩文言ひ
あくも今日の仕合せ
実ゆ勝ゆ敗るくも
天運のあを処と
強勇むさうの
勝男も天を
仰いて歎息し
大の眼ゆ一滴の涙を
うるめ暫し黙然として此後
人らひ侍へて逸見の涙

▲より出永口へ進む
川路少
将の別働
隊い先鋒
黒川中佐五中とも
ひらゆ出水ゆうとし
う此処の総指揮と
なる戦将伊東四郎左
エ門とゆ者六百人を
もちゆて軍門ゆ
降伏まるる
字二中尉

松と称せ
備も逸見いかく歎く
ともくらゆ解と一度ら
地を退散して再び日向の要地ゆ
より官軍の英気をくだ此敗
戦とくのくと我と我が心ヨ決し
兵士とくくゆ山間を経て遂ゆ
日向路へ引上うう明れば六月
廿日の拂暁より第三旅団
三浦少将の兵ら某腰兵らうの
用意十分ふその大口を発して大隅
の国野木粟野の地方を目ざして威
気ようくとして進ぶ兵せう茲ゆまる水俣▲

つぎ二中隊となりたの大年候こうて六月廿日の暁天こう阿久根街道へまぎしたこころ賊兵諸所ゑ砲臺をきづきたる高尾の駅ゑ賊ちかく集しく進撃の官軍を三方よりつゝ狭こんで打立し官軍一時へまをぶ苦せんるこ一守主中尉をけく下ちしく奮ぐた突せんし賊軍とやぶり多六時ゑ高尾を乗こりその夜のうちゑッッの臺ゑ兵をまくめ翌廿一日のいまぐ明やこれ

午前四時ぐろこう阿久根のこの本道こう進ぐたせしゑ賊兵左こくの山陰ゑ潜伏して烈しく発砲しそこうせたるゲ官軍たぐちゑ勇進

まく賊兵をあひ立て遂ゑ阿久根とせめ取りたちまち進んで一里ばかりの地ゑ至りしゲ敗兵左右の山谷ゑよりて砲撃をせども官軍少しもひるまず即時ゑこの所とも追退け大砲小銃あまさず分捕り賊兵ちぐく敗走しそ西のうえと引退く官軍坂をえて追撃し川内川まで達しこう出水こうヒゲ山の方へ向ひ一隊ハ川とこころ宮の城を攻討せしゑ所々ゑ敗軍をしる賊兵つゞく

つゞき

此地に屯集して手づよく防禦に死力をつくせども
衆中官軍の威勢銃くちべにも保ち堪ずして
と能はぎ怒ちに破られて惣敗軍となる
さるぐも蜘蛛の子をちらすがごとくに
右往左往に逃れ
日向の地方へ退きて
是より川内川の激戦に
あらびに人吉より飯野へ
進軍の山田少将の
兵線へ賊軍ふらに突入
して官軍の苦戦あるに
線内の奇談より次の巻に
巨細に記載せん

官許 朝鮮名法 牛肉丸

小袋 六錢二厘五毛
中袋 十二錢五厘
大袋 二十五錢

一此薬は男女に限らず一切の病に効あり
[illegible]

書物錦繪店 東京横山町三丁目二番地 辻岡屋文助